



六月の鯨

作者：レイバック

概要：初夏、新緑の鮮やかな頃。 三人の少年達が繰り広げるほんの小さな冒険譚。

自転車を漕ぎながら公園の中に目をやると、並んだブランコをすれ違いに揺らしている二つの背中が見えた。

「あいつら早いなー」

佑太は、ドリフトさせるように後輪のブレーキを強くかけ、緑鮮やかな木々に囲まれた公園の入口に自転車を停めた。単車や自転車の侵入を防ぐ逆U字型の車止めの脇に、斜体で書かれた川の字のようにマウンテンバイクが三台揃う。佑太は黄色く塗られた車止めに勢いよく飛び越え、公園を走り出した。木陰に差し掛かった瞬間、地表近くに溜まっていた冷気が、短パンから伸びた佑太の両脚をすうっと冷やす。六月末。セミたちが鳴き始める前のまだ静かな公園に、佑太の澄んだ声が響いた。

「おーっす」

佑太に気付いた二人は、スニーカーの底を地面に擦りつけ、ブランコの揺れを止めた。

「あーおはよう佑ちゃん」

色白で小太りのミノルが笑顔で言う。

「おう佑太」

佑太と同様に早くも真っ黒に日焼けしているアキラが低い声を出す。

「おはよ。早いなーおまえら」

佑太は手を挙げて二人に応える。

「まァ、どうせすることもないしな」

「うん。学校がないと、朝から退屈でしょうがないよね」

アキラとミノルは、示し合わせたかのように同じタイミングで、ブランコからはみ出した足をぶらぶらとさせている。

先週の金曜日から、県内の学校は全て休校となっていた。修学旅行帰りの学校の生徒から新型インフルエンザの感染者が見つかったからだという。これは感染の拡大を防ぐためということでの休校措置だったが、急に学校がなくなれば、家庭も生徒達自身も戸惑うのが自然だろう。

大方の予想通り、繁華街のゲームセンターやカラオケボックス付近では遊ぶ気満々の中高生たちがテレビカメラに捉えられていた。当然、各学校の生徒は自宅待機を申し渡されている。だが、共働きで両親の監視がない家庭においては、そんな指導もまるで拘束力を持たなかったようだ。

現にこうして、小学六年生の佑太たち三人も、朝早くから家を飛び出している。

「それより聞いてくれよ。さっきな、うちの自転車置き場の近くで、近所のおばさんが喋ってたんだけどさあ——」

佑太はそこで言葉を区切った。もちろん、後に続ける言葉のインパクトを増すためだ。

「なんだよ。佑太、早く言えよ」

「そうだよ、なんなんだよー」

案の定、焦らされた二人は、ブランコから身を乗り出していた。

「ふふ。あのな。じつは、塩見浜に、クジラが打ち上げられてるらしいんだ」

二人は、唐突な佑太の言葉に、ただきょとんとしている。

「えー？ クジラってあのでっかいクジラ？」

やがて、ミノルが呆けた顔のまま口を開いた。

「そう、あのでっかいクジラだ」

「ほんとかよ。俺さっきまでテレビ見てたけど、そんなこと一言も言ってなかったぜ」

疑り深いアキラは冷めた口調で言う。

「バカだねえ、まだテレビ局に情報が行ってないだけだって」

「ほんとだったらすごいよねー」

空想癖のあるミノルは、ブランコを揺らしながら、空を見上げていた。

「そこでだ。どうだ？ いまから三人で見に行かないか」

佑太は二人に一番伝えなかった言葉を口にした。

「えー、だって、一応外で遊ぶの禁止されてるじゃん。オレたち」

ミノルは口を尖らせて言う。

「バーカ、そんなの、母ちゃんが帰ってくるまでに戻ればいいだけの話だろ」

「まァたしかに、まだ10時過ぎだしな」

アキラは公園の真ん中に立っている時計に目をやった。

「いまから出たら、夕方には帰ってこれるか」

「そうだよ。な、アキラ、おまえも見たいだろ？」

「そりゃまあそうだな。クジラを近くで見れるチャンスなんて滅多にないだろうし。それで、そのクジラはまだ生きてるのか？」

「それがさあ、分からないんだよ。そこまではおばさんも言ってなかったからさ」

「佑ちゃんとアキラが行くんだったら、オレ行く」

ミノルは目をきらきらさせながら佑太とアキラの顔を交互に見ている。

「アキラは？」

佑太はたずねる。

アキラは、無言で、つま先に穴の開いた自分のスニーカーを見下ろしている。

「どうなんだよ」

佑太はじれったい思いでアキラを促した。

「よし。行ってみるか」

アキラはそう言うと、反動をつけてブランコから飛び降りた。

「どうする？ 自転車で行くか？」

佑太はアキラに向かって言った。

この辺りから塩見浜までは、それほどの距離ではない。佑太たちの足でも、4、50分も自転車を漕げば行けるはずだった。

「電車の方がいいだろ。日が暮れるぞ」

アキラは小さな声でそう言うと、ちらりとミノルの方に目をやった。当のミノルは、アキラの視線にもまるで気付かずに、悠々とブランコを漕いでいる。

佑太はアキラの言葉に頷いた。

「よし。電車にするか。じゃ、みんな必要なものを家に取りに帰って、もう一回ここに集合でいいな」

「必要なー」「ものってー？」

ミノルが小太りな身体をスイングさせながら佑太にたずねる。

「とりあえず電車賃だな。往復1000円もあれば足りるだろ。あとはなにが要るかな？」

佑太はアキラの方を向いて言った。

「お菓子！」

ミノルが急ブレーキでブランコを止めたかと思うと大声を上げた。意表を突かれた佑太とアキラは、一瞬固まったあと、同時に嘔き出した。

「駄目だ。腹いてえー」

佑太はブランコの柱に手をかけて必死に声をしぼり出した。

「ミノルー、一応これ、冒険のつもりなんだからさー。それらしいものも持って来いよなー」

「ええー、それらしいものってなんだよー。水筒とか？」

「ミノルにかかると冒険っていうより遠足だな」

アキラがからかうような調子で、ミノルの二の腕を肘で軽く押した。

「ちょ、ちょっと、やめろよ。じゃあいったいなんなんだよー」

ミノルは柄にもなく怒った様子でアキラに言う。

「ポケットナイフとか懐中電灯とか、あとコンパス？」

「おいおい。ジャングルに行くわけじゃないんだからさー」

佑太の突っ込みで、三人とも一斉に笑う。佑太たちは冗談を飛ばしながら公園の入口に向かい、停めておいた自転車にまたがった。

「じゃ、二十分後にここに集合な」

☆

☆

☆

七階でエレベーターを降りた佑太は、廊下を奥へと進んでゆく。自宅の前で立ち止まると、ポケットから鍵を取り出し、ドアを開けた。ただいまーと言ったところで家には誰もいない。父親はもちろん仕事だし、母親もパートに出ていた。

佑太は自分の部屋に入った。乱雑に積み上げられたダンボール箱を掻き分け、学習机の上にはぼつんと置かれた貯金箱を手取る。裏返して底蓋を開けると、小銭と折りたたんだ紙幣が数枚出てきた。先月ゲームソフトを買ったため、紙幣は数枚しか残っていなかったが、その中から二枚の千円札を抜き取り、短パンのポケットに滑り込ませた。部屋を後にした佑太は、キッチンで冷蔵庫から500mlのお茶のペットボトルを取り出し、リュックの中に入れた。

急いで公園に戻ると、既にミノルが待っていた。

「おー、早いなミノル」

「ちゃんとお菓子持ってきたからね」

ミノルは嬉しそうにパンパンに膨らんだ背中のリュックを叩いた。

「お、お前、もしかして、その中身、全部お菓子？」

「まっさかー、ちゃんとジュースも持って来てるよ」

ミノルは首から下げた水筒を揺らした。同時におなかの肉もたぶたと揺れている。やっぱリュックの中お菓子だけじゃん！ と、佑太は心の中で突っ込んだ。

「ミノル、それリュックに入れとけよ。ぶらぶらさせてると自転車漕ぎにくいだろ？」

「あ、それもそうだね」

ミノルはリュックを肩から外そうとするが、水筒のストラップと絡まって一人でお祭り騒ぎになっていた。

「あーもう、俺が入れてやるよ」

佑太は苦笑いしながらミノルの首から外した水筒をリュックの中に入れてやった。ちらっと見えただけでもリュックの中には数種類のお菓子が入っているのが分かった。

「それにしてもおそいなー、アキラ」

佑太は公園の時計を見やった。

「うん、もう余裕で三十分以上経ってるよね」

「家まで見に行ってみるか」

佑太とミノルは自転車にまたがり、アキラの家へと漕ぎ出した。

佑太とミノルは、アキラの住むアパートの横にある駐輪場の空きスペースに、自転車を停めた。

すると突然、建物のどこからか、男の人の怒声とガラスの割れるような音が聞こえてきた。

「なんだよ、今の音」

佑太は、独り言のように口にした。ミノルは佑太の隣で身体を強張らせている。二人の前にある木造二階建てのアパートは相当に古く、防音性などほぼ無きに等しい造りに見えた。

辺りに再び静寂が戻る。佑太とミノルは顔を見合わせた。アキラが両親と住む部屋は、一階の一番奥だった。

「呼びに行こうぜ」

佑太はミノルに声をかけた。

「うん」

ミノルは震える声で返事をする。

佑太は砂利を踏みしめながらアパートの廊下に向かう。ミノルは先を歩く佑太のあとを追って付いて来る。

いきなり錆びついた鉄階段の影から黒猫が飛び出してきた。

「わぁっ！」

ミノルが佑太の後ろでおおげさに声をあげた。佑太が振り返ると、ミノルはコンクリートの上で尻餅をついていた。

「おいおい、たかが猫じゃんかよ」

佑太は笑いながら手を差し出して、ミノルを立たせてやる。

二人はアキラの家の前で並び、足を止めた。ドアの横に表札が掛かっている。朽ちかけた木の表面に滲んだ墨で橋本と書かれていた。

「いいか、押すぞ」

佑太は自分に確認を取るように声を出した。ところが、佑太の指がブザーに触れるか触れないかというタイミングで、急に内側からドアが開いた。

「出てけっ！ このクソガキが！」

さっき聞こえたのと同じ声が響いた。同時に、部屋の中からアキラが転がるように飛び出してきた。スニーカーがちゃんと履けていなかったのか、アキラは前のめりに倒れそうになる。佑太は咄嗟に両手を伸ばし、アキラの身体を支えた。

「お、おい、大丈夫かよ」

佑太は目の前の状況に戸惑いながらも、アキラに声をかける。

「失せろっ！」

部屋の中から怒りの声と共になにかが飛んできた。佑太がさっと身体を避けると、くの字にひしゃげたビールの空き缶が、乾いた音を立ててミノルの足元に転がった。

「行こう」

佑太の肩を借りて態勢を立て直したアキラは、駐輪場のほうへ歩き出した。開けっ放しのドアの前に取り残された佑太とミノルは急いでアキラのあとを追う。

「アキラ、おい、アキラってば、待てよ」

佑太の問い掛けにもアキラの背中では反応しない。アキラは駐輪場から自分のマウンテンバイクを取り出し、佑太とミノルに向かって首をしゃくった。

「公園」

アキラはぶっきらぼうに言い放った。佑太とミノルは、自分たちの自転車にまたがり、アキラのあとを追った。

ほんの数分で公園に着いた。アキラ、佑太、ミノルの順で、入口に自転車を停める。アキラは公園の中へは入ろうとせず、黄色の車止めに尻をあずけた。

佑太とミノルはアキラからの説明を待っていた。だが、アキラはうつむいたまま何も話そうとしない。三人はいびつな三角形の位置関係で、しばらくのあいだ立ち尽くしていた。やがて痺れを切らせた佑太は、アキラに声をかけた。

「アキラ、お前また、父ちゃんに——」

「言うな」

アキラは吐き捨てるように言った。顔を上げたアキラの口元は赤く腫れ上がっていた。

「でも、お前、その顔——」

「もういい」

アキラは手のひらを佑太の前に突きつけるようにして遮った。

「佑太、ミノル。お前ら二人で行けよ」

佑太はアキラの言葉に一瞬固まったが、すぐに言い返した。
「何言ってんだよ。三人で行くから意味があるんだろ！」
「そ、そうだよ」
ミノルも佑太に加勢した。アキラはぎこちなく肩をすくめ、ふうっと息を吐いた。
「金がないんだ」
アキラは自嘲するように短パンのポケットを叩いてみせる。
「お金ならある。俺、少し多めに持ってきたからさ。電車賃くらい余裕だぞ。それに、ミノルがいっぱいお菓子持ってきてるから食べ物心配もないし、お金なんて要らないよ」
佑太はアキラを安心させようと、つとめて明るい声で言った。
「いいから、お前ら二人で行けよ」
アキラは佑太たちに向かって同じ言葉を繰り返した。
「だから、三人で行かないなら、俺たちだってやめるよ」
佑太も負けじと言い返す。
「バーカ。俺はな——」
アキラはそこで、にやりと笑った。いや、笑おうとした。だが、口元の傷にさわったのか、きゅっと顔をしかめた。アキラは頬を押さえながら言葉を続けた。
「——俺はな、自転車で行く。お前ら二人は、電車で行くんだ」
「な、何言ってんだよ——」
佑太は慌てて、しどろもどろになった。
「さ。早く出発しなきゃ日が暮れるぞ」
アキラは真っ黒に日焼けした顔に不敵な笑いを浮かべていた。もう話は決まったんだよ。と言わんばかりに。
「俺と、お前ら」
アキラは自分と佑太たちを交互に指差す。
「どっちが早いか、ジュースを賭けて、競争だ」
アキラはそう言うと、ポケットから取り出した100円玉を、空高く親指で弾いてみせた。

佑太たちは自転車を漕ぐ。アキラを先頭に、佑太、ミノルと、適度に間隔を空け、縦一列に編隊を組む。緩やかな坂を上り切ると、その先は直線道路が続く。スーパー、ホームセンター、ファミレスと、道路沿いには大きい店が並んでいる。賑やかな箇所を通り過ぎ、さらにしばらく走ると、やがて駅の建物が見えてきた。

先頭のアキラは、ゆっくりとスピードを緩めてゆく。駅前のロータリーに隣接する駐輪場の前で、アキラは完全にペダルを止めた。佑太とミノルもすぐに追いつき、アキラの横に並んだ。

「ここで、お別れだな」

アキラはなぜだかとても嬉しそうに言う。

「お前、ほんとに自転車で行くつもりか？」

佑太は、返ってくる答えが分かっているのに、つい言ってしまう。

「なんだ佑太、そんなにジュース代が惜しいか？」

アキラは、わざとらしく片眉を吊り上げた。

「そ、そんなことねーよ」

「ねえ、二人とも、それより、あれ見てよ」

ミノルが二人の会話に入ってきた。アキラがミノルの指の差すほうを振り返った。

「げ、あれ1組の担任じゃん」

「えーと、斉藤先生だっけ」

佑太は目を細めて言った。白いマスク姿の教師は腕を組み、駅の改札へ降りる階段の前で仁王立ちしていた。

「なんであんなところに突っ立ってるんだよ」

アキラは、訳が分からんといった調子で言う。

「俺分かった」

ミノルが甲高い声を出す。

「なんなんだよ」

二人の声が重なった。

「見張ってるんだよ。ほら、生徒が遊びに行かないように」

ミノルは人差し指を立てて説明する。

「そうか、インフルエンザか」

「だって、俺たち自宅謹慎中の身だもん」

ミノルはそう言いながら、ひとりうんうんと頷いた。

「バーカ。自宅待機だろ」

佑太はすかさず突っ込んでやる。

「どうしよう？」

「捕まったら電車に乗れないぜ」

「みんな自転車で行くことにする？」

「でもミノルお前、身体……」

佑太はミノルに向かって言った。

「塩見浜でしょ？ 行けると思うよ」

ミノルは、まるで平気そうな顔をしている。

だが、佑太は思い出していた。ミノルは先日の体育の授業中にも胸を押さえて倒れたばかりだった。生まれつき心臓が弱く、医者から激しい運動を止められているのだ。もっとも倒れた時は、ただラジオ体操をしていただけなのだが。幸い大した事はなかったものの、その時はさすがに担任の教師も焦っていた。

佑太は額に手をかざし、空を見上げた。太陽は公園にいた時よりも、はるかに高度を上げている。この強い日差しの中、何十分もミノルに自転車を漕がせることは、どう考えても無謀に思えた。

「俺にいい考えがある」

アキラが突然顔を上げた。

「いいか。俺がおとりになって、やつの前を自転車で通るから、その隙にお前らは、あのエレベーターで下に降りろ」

佑太はアキラの指差す方に目をやる。駅の階段の左手、少し離れたところに、一基のエレベーターがあった。おそらく車イスの人や、お年寄り用に設置されているのだろう。たしかにあの位置なら、教師の視線さえ逸らすことが出来れば、なんとかなるかもしれない。

「でも、お前が捕まったらどうするんだよ」

「おいおい、俺があんなメガネに捕まるかよ」

アキラは気分を害した様子で眉をしかめる。

「分かったよ。とりあえず、自転車を止めよう」

佑太とミノルは、駐輪場に自転車を停めに行った。その後、互いの動きを確認した三人は、早速作戦に移った。

植え込みに身体を隠しながら佑太とミノルは駅に近付いてゆく。おとり役であるアキラは、ロータリーをのろのろと自転車で進んでゆく。植え込みがちょうど切れる手前で、佑太とミノルは待機する。教師は、まだアキラの自転車の気付いていないようだ。アキラは、ちらりと佑太たちの位置を確認し、ペダルをぐっと踏み込んだ。不意を突かれた教師は、一瞬戸惑ったように見えたが、すぐに声を張り上げた。

「あ、こらっ！」

「今だ！」

佑太とミノルはエレベーターに駆け寄る。佑太は「降下」のボタンを連打する。運良く、すっとエレベーターが上がってきた。

後ろを振り返ると、教師が逃げようとするアキラを走って追いかけていた。

エレベーターのドアが開く。急いで佑太とミノルは乗り込んだ。今度は「閉じる」ボタンを連打する。ドアが閉まると同時に、埋め込まれたガラスから、アキラが教師に捕まる光景が見えた。

「うっわー！ 捕まってんじゃない！」

ガラスの先は闇。エレベーターは一気に下降する。

そして、ドアが開いた。佑太とミノルは、改札の前で顔を見合わせた。

「どうしよう？」

顔を見合わせていても、何も案は出ない。時間ばかりが過ぎてゆく。やがて電車の到着を知らせるブザーが鳴り始めた。

「仮に様子を見に行っても、俺たちまで捕まったら最悪だ。アキラの行動が無駄になる」

「でもアキラが……」

「アキラはきっと、家に帰れて怒られるだけだと思う」

「うん」

「帰るフリをして進路を変えて、塩見浜まで来るよ。あいつなら」

「そうだね」

「行こう」

佑太とミノルは塩見浜までの切符を買い、改札を走り抜けた。

佑太とミノルが階段を駆け上がると、すぐに電車が滑り込んできた。二人は息を切らせながら目の前の車両に乗り込んだ。乗客は少ない。横並びのシートに座っている人もまばらだった。二人分の空席を見つけた佑太とミノルは、背伸びをして吊り棚にリュックを載せた。

電車がゆるゆると動き出す。佑太は座ったまま後ろを振り返った。窓から駅前のロータリーが見えるかと思ったのだが、駅舎やビルの陰になり、まったく見えなかった。佑太はあきらめて前を向いた。

「ねえ、アキラ大丈夫かな」

ミノルが不安げな表情で佑太に話しかけてきた。

「心配すんな、あいつなら絶対来るよ」

「いや、それもだけど、あいつの傷……」

ミノルは言いかけて、自分の口元を指差した。

「ああ……」

佑太も言葉に詰まった。

これまでもアキラは、時々、学校へ顔を腫らしてくる事があった。手足に痣や、すり傷も絶えなかった。生傷が絶えないのは男子にとって勲章のようなものだが、アキラのそれは、頻度といい、傷の大きさといい、明らかに度を越したものだ。だが、佑太たちがいくら訊いてみても、アキラは、自転車で転んだとか、木登りしてて落ちただとか、笑いながらいい加減な理由を口にすればかりだった。

佑太は思う。アキラが酒びたりの父親から暴力を受けているのは、ほぼ間違いない。怪我の理由を明るく笑ってごまかしていても、アキラの瞳の奥に宿る暗い光がそう物語っていた。

「ミノル、アキラに訊くなよ」

「え？」

「傷の事。その話題、あいつ嫌がるからさ」

「うん、さっきもそうだったもんね」

ミノルは視線を落とし、両足をぶらぶらとさせる。

ひとつ、ふたつと駅を過ぎるうちに、向かいの車窓から、海が見えはじめた。木々が途切れる度に現れる群青の海原。波間にきらきらと揺れる細かな光の群れが佑太の目を突き刺す。佑太もミノルも、穏やかな電車の揺れに身をまかせながら、無言で、じっと海を見ていた。

☆ ☆ ☆

駅に着いた。

佑太のスニーカーのゴム底が、コンクリートの上の砂粒を掴む。じゃりっと音がする。ホームに両足で降り立つと、潮の香りがした。頬を打つ風は強く、生温かかった。佑太とミノルは改札を通り抜けた。塩見浜までは歩いて十分弱のはずだった。

駅前の小さなロータリーから繋がる県道をすぐに右手に曲がり、民家が立ち並ぶ細い道を進んでゆく。塗装の剥げかけた赤いポストや、閉まっている写真屋、開いてはいるものの中に誰も居ない食料品店。どれだけ歩いてみてもひと気がほとんどない。海水浴に来るたびにいつも目にしていたカキ氷や浮き輪を売っている出店もなかった。

古い民家の軒先で寝ていた大きな雑種犬は、佑太たちが警戒しながら側を通り過ぎても、薄く片目を開けただけだった。吠えるのも面倒くさいといった風情だった。ひと気のない海辺の町は、佑太の記憶にある夏の雰囲気とはまるで違っていた。ひとことで言うと、そう。寂れていた。

やがて道路の舗装が途切れ、砂利道に変わった。顔を上げると、堤防が目に入った。

「海だ！」

佑太の隣で、ミノルが叫んだ。

堤防の向こう。隣り合う海の家を錆びたトタン屋根の隙間から、確かに海が見えている。

「海だー！」

ミノルは両手をあげて走り出した。ぱんぱんのリュックが激しく上下に揺れていた。

「ちょっとミノル、おい！」

佑太も負けじと走ってミノルを追いかけた。

堤防に穿たれた三段ばかりの階段を越え、二軒の海の家に挟まれた細い通路を駆け抜ける。視界が開けた途端、強い日差しが佑太の頭上に降り注いだ。佑太に先駆け、砂浜に突進していったミノルは、波打ち際数メートル手前で立ち尽くしている。その姿に釣られたように佑太の足もスピードを緩めた。大きなリュックの背中へ向け、砂浜を一步一步踏み締めるように歩いてゆくと、ミノルが腑抜けたような顔つきで振り返った。

「あれ？ ねえ佑ちゃん、俺たち何しに来たんだっけ？」

「……。バカ」

佑太は、ねえねえとうるさいミノルを相手にせず、辺りを見回した。左右数百メートルに亘って広がるオフシーズンの砂浜は閑散としている。波打ち際、はるか彼方に、犬を散歩させている人の姿がぼつり、かろうじて見えた。

「あっ！」

ミノルが突然素っ頓狂な声を上げた。佑太はミノルの指先を目で追った。

片膝を立て、堤防に座り込んでいる一つの影。

「アキラー！」

ミノルがばかでかい声を上げる。それが合図だったかのように、アキラは堤防から砂浜に、ひょいっと飛び降りた。自信満々な顔つきで、悠々と佑太たちのもとへ歩いてくる。

「おまえら遅えぞ」

アキラは細いあごを持ち上げ、眩しそうに眉をしかめたあと、にやりと笑った。伸びたTシャツの首元は汗で色濃く染まり、額から流れる幾筋もの汗が陽光をきらりと反射していた。

「俺の勝ちだな」

アキラは言った。

「なんだよ、先に着いてたのかよ」

佑太は舌打ちをした。

「ああ、ついさっきだけどな。タッチの差だったな」

「いやー、無事で良かったよ。俺たち心配してたんだぜー。ね、佑ちゃん」

ミノルが腰に手を当て、妙に偉そうな口調で言う。

「お前、完全に忘れてただろ、アキラのこと。海だー！ わーい！ とか言って子供みたいにはしゃいでたの誰だよ」

佑太はミノルをからかうように言ってやる。

「ちょっ、そんなことないないないない、嘘だよ、アキラ」

ミノルは慌てふためいて手をぶんぶんと顔の前で振る。

「ああ、堤防から見てた」

アキラがニッと白い歯を見せる。

「あらあら、ミノルちゃんってば、転ばないかしらー。って心配してたんだよ。俺も」

「こら！ アキラ！」

ミノルは頬を赤く膨らませ、やーいやーいと尻を打っては逃げ回るアキラを、転がるように追いかけている。

「へいへーい」

「待てーっ」

やれやれ。

佑太は放り投げられたミノルのリュックを拾い上げると、海の家の前に捨て置かれた青色のベンチに、どかりと腰を下ろした。

「おい、佑太、こっち来てみる！ すげーぞ」

佑太が顔を上げると、さっきまで追いかけてこしていたアキラとミノルが肩を並べ、波打ち際でしゃがみ込んでいる。

「なんだよー」

佑太は座ったまま大声で尋ねた。

「いいから、こっち来いって！」

「ちえっ」

重い腰を上げた佑太は、しゃがんだままもぞもぞとしている二人の元へ、ゆっくりと向かった。

佑太が波打ち際に歩み寄ると、二人は突然立ち上がり、なにかを投げつけてきた。

「ぶへっ」

潮の鮮烈な香りとトゲトゲとしたしょっぱさが佑太の口の中に侵入してくる。手で触れてみると海藻がべったりと顔に張り付いていた。

「やーい」

アキラとミノルは佑太の顔を指さしては、腹を抱えて笑っている。

「なにすんだよ！」

佑太たちは砂浜に打ち上げられた海藻をちぎっては投げ合い、砂浜に足を取られながら追いかけてこをした。

やがて、疲れ果てた佑太は二人を追うことをやめ、海の家ベンチに座り込んだ。それを見て、アキラも佑太のとなりに腰掛けてきた。飽きっぽいミノルは一人波打ち際で座り込み、指先で濡れた砂の表面をいじっている。またなにか興味を引かれるものでも見つけたのかもしれない。

「佑太」

「ん？」

「なんで嘘ついたんだ？」

アキラは海の方を見たまま静かに問いかけた。

佑太は言葉に詰まる。

「クジラの話、嘘だったんだろ」

アキラは怒るでもなく淡々と言葉を継いでいく。

「お前らが着く前に、散歩してた地元の爺さんに訊いてみたけど、クジラなんてもう何年も上がってないって言ってたぞ」

「ねー、貝殻たくさん落ちてるよー！」

ミノルが波打ち際から佑太たちの方を振り返り、大声を上げる。

「ああ、あとで行くー」

アキラは片手を挙げてミノルに応えた。

「まあ、遠足気分を楽しめたからいいんだけどな」

アキラは挙げた手を下ろすと、汗ばんだ首筋をぱたぱたと扇いだ。すうっと潮風が吹き、ベンチの下をくぐり抜ける。二人の足元を細かな砂が舞う。

「俺、この夏、引っ越すんだ」

佑太は、波打ち際に貝殻に夢中になっているミノルの背中を見ながら言った。

「転校することになる。だから、お前らと海に遊びに行くことももうできなくなる」

「そうか」

「一ヶ月前くらいに親から言われたんだけど、でも、俺、ずっとお前らに言えなくて」

「分かった。佑太、もういいよ」

アキラは佑太の背中をぽんと叩いた。

「ミノル！ こっち来いよ！」

ベンチから腰を上げたアキラは、大声でミノルの名前を呼んだ。二人の元に重い足取りで歩いてきたミノルは、ぜいぜいと息を切らしている。

「お前なー、必死に貝殻拾いすぎなんだよ」

アキラは呆れたように笑いながらミノルの頭を小突くふりをする。

「少し休もうぜ。な？」

「うん」

ミノルは青いベンチの端にどかりと座り込んだ。三人横並びになって、しばし、ぼうっと海を眺める。先端を白く泡立たせた波は穏やかに浜へ打ち寄せ、断続的に吹く潮風は、佑太たちの頬を優しく撫でていった。

「お菓子食べる？」

ミノルがいつのまにかリュックを膝の上に載せ、店開きを始めようとしていた。

「なあミノル、クジラ、いないんだってさ」

アキラが小さくもない声でとなりのミノルに耳打ちする。

「え？ クジラ？」

ミノルはいったい何の話？ といった顔つきできょとんとしている。

「あー、そうだ、クジラだ！ クジラどこ？」

唐突に思い出したようだ。ミノルは傷の付いたCDのようにクジラクジラと繰り返し始めた。

「だーかーらー、クジラはいないのー」

アキラは明らかにミノルの反応を楽しんでいる。

「うそっ！？ 佑ちゃんうそだったのか！」

ミノルはアキラ越しに佑太を睨みつけ、マンガのキャラみたく頬を膨らませて怒っている。

「そんな目くじら立てるなよ。こうやって遊びに来れたんだからいいじゃん。な？」

アキラがまあまあとミノルをなだめる。アキラのフォローのおかげで、クジラの話はそこであやふやになったまま終わった。

ミノルが持ってきたお菓子やジュースを、三人で飲み食いしながらふざけた話をしているうちに、時間は早足で過ぎていった。いつのまにか陽は傾き始めていた。

「そろそろ帰るか」

アキラが言った。

佑太とミノルが駅へ向かう道の途中で待っていると、アキラは堤防沿いに自転車を押してきた。

「あれ？ それパンクしてない？」

ミノルがアキラの自転車の後輪を指差す。

「ああ、ゴール前でパンクしやがったんだよ」

「帰りどうするの？」

「自転車屋は近くになさそうだし、とりあえずお前らと一緒に電車で帰るよ。まあ金は100円しか持ってないんだけど——」

「俺、電車賃なら出すよ」

佑太はアキラの言葉を遮るように言った。だがアキラはそれをさらに手で遮り返す。

「——待て、それより、電車賃はいくらだ？」

「300円」横からミノルが答える。

「フッ」

アキラは気取ったしぐさで前髪をかき上げてみせた。スポーツ刈りのくせに。

「お前ら、忘れたか？ 賭けに勝ったのは誰だ？ さあ、キミたち敗者は速やかにジュース代を払いなさい」

アキラは白い歯を見せながら手のひらを前に差し出した。

駅に着き、切符を買った。駅員に事情を説明するとアキラの自転車を載せていくことを許してくれた。

☆ ☆ ☆

電車がするするとホームへ入ってくる。

佑太たちはアキラの自転車が邪魔にならないよう乗客の少ない車両に乗り込むと、ベンチ式のシートに並んで腰掛けた。佑太のとなりではアキラとミノルが学校の先生の話で盛り上がっている。佑太はひとり後ろを振り返り、窓越しに海の方を見ていた。夕日を反射してきらめく波間がとても美しかった。佑太はこの光景をけして忘れまいと思った。必死に目の奥に焼きつけようとした。

と、突然、沖合いの海面がぼこりと浮き上がり、海からなにか黒い大きな塊が飛び出した。その円筒状の物体は空中で弓なりに身体をくねらせ、一瞬静止したかと思うと、大量のしぶきを上げながら横向きに着水した。

クジラ！？ 佑太は自分の眼を疑った。

「お、おい、見ろよ！」

「なんだよ」

アキラとミノルが会話をやめて佑太の方を向く。

「ク、クジラだ、今、飛んだ、飛んだ！」

佑太の声が震える。

アキラとミノルは、ぐるりと後ろに向きを変え、窓に張り付くようにして海の方を見た。

六つの眼が注がれた遥かかなたの海面は、呆れるくらいべた凧で、ただ夕日がオレンジ色の光の帯を、まっすぐに走らせているだけだった。

「やれやれ、もう騙されないぜ」

アキラがため息をつく。

「ほんとに見たんだって！」

「はいはい」

「ねえ、アメちゃん食べる？」

やはりミノルは飽きっぽかった。

三人は各駅停車ののんびりとしたリズムに揺られてゆく。佑太はなんども後ろを振り返り、水面に浮かぶ黒い影を探したが、クジラはもう二度と姿を現すことはなかった。やがて海は視界から消え、じょじょに見慣れた風景が車窓に流れ始めた。

佑太の口の中でミルクの甘みが消えかかる頃、電車は速度を緩め、ゆっくりとホームに滑り込んでいった。

了